〔翻訳〕

たくましい少女たち、繊細な少年たち*
― ヨハンナ・シュピーリの児童文学作品について ―

ヴェレーナ・ルッチュマン
川島　隆 訳

序.

「そこでのあなたの語り口には、まるで迷いがありません」とコンラート・フェルディナント・マイヤーは、1880年7月7日のヨハンナ・シュピーリ宛の手紙で書いている。これは『ハイジの修行時代と遍歴時代』を読んでのことで、献本への感謝を述べたあと、彼はこう付け加えている。「私はそこから多くを学びました」。このマイヤー書簡からの引用は、しばしば看過されがちなヨハンナ・シュピーリの一面を浮かび上がらせる。彼女は必ずしも――または、ただ単に――あのハイジのような、大自然の中だけでしか生きられない《アルプスの少女》ではなかったし、チューリヒ市書記官の妻として不幸と不満をかこちながら生涯を費やした女性というわけでもなかった。シュピーリが友人や知人に宛てて書いた手紙を読めば、相手によって調子がすっかり異なることが分かるだろう。まず、彼女が自らの抑鬱状態や罪悪感、心の乾きについて述べている、同性の友人宛の手紙がある。こうした手紙は、ときに熱に浮かされたような調子を帯びる。もっと後の手紙、例えばC・F・マイヤー宛のものは、迷いなく判断を下すことのできる、冷静な書き手の人柄をかいま見せている。その他にも、特に姪のアンナ・ウルリヒ宛の手紙のように、今日なお「子どもと子どもを愛する人のための物語」の中で説得力を発揮している、あの機知と活力とが表現されている手紙がある。つまり、シュピーリは書簡の中で、そのつど自分が手紙を書いている相手に合わせて、まったく異なる複数の顔を使い分けてみせているのだ。

そしてヨハンナ・シュピーリは、出版した作品においても、書簡の場合と同様、そのつど対象となる読者層に合わせて手法を使い分けていた。そのことに疑いの余地は少ない。彼女はその際、それぞれのジャンル――大人向けの教化文学、少女小説、子ども向けの物語――で通用している約束事に、そのつど依拠したのである。

---

* Rutschmannn, Verena: Energische Mädchen – sensible Buben. Zu den Kindergeschichten von Johanna Spyri. In: Schweizeriches Institut für Kinder- und Jugendmedien (Hrsg.): *Johanna Spyri und ihr Werk. Lesarten.* Zürich 2004 [以下、*Lesarten* と略記], S.91-106.

シュピーリ自身が自らの作品を、高尚な文学に寄与すべきもの、すなわち自律的な価値をもつ芸術とは見なしていなかったことは、彼女がC・F・マイヤー宛の手紙で述べているさまざまな発言から明らかになる。彼女はマイヤーにしばしば自分の新刊を送ったし、彼の方も同じことをした。彼は1883年、民衆カレンダー『ライヒスボーテ』(*Der Deutsche Reichsbote*) に掲載されたシュピーリ作品を受け取った。これに関してマイヤーは次のように彼女に書き送っている。「当初はストーリーとモチーフの単純さに軽く違和感を覚えたのですが、あとから感嘆せずにはいられませんでした。あなたが無から何ものかを、それも美しいものを創り出していることに。」シュピーリはこう答えている。「私の暦物語がきわめて単純なたぐいのものだという点、あなたのおっしゃることは多分正しいでしょう。こんなものを書くのは、あなたには似つかわしくありません。思うに、あなたには豊かさと力の横溢がありますから、こんな枠組みはすぐ打ち壊してしまうはず。こんな分野が、私にはちょうどいいのです。私は、粗悪な言葉を追いのける言葉を民衆のあいだに広めることができたと感じられたら、それで満足です。」[1] この言葉でもって、シュピーリ自身はキリスト教的な民衆文学の系譜に自らを組み入れている。このジャンルの作者たちは神学および民衆教育の言説に接続していたのであり、芸術家としての使命感が作家活動の動機になってはいなかったのである。

つまり、シュピーリが敬虔主義的な出版社のために大人向けのテクストを書くときには、それは教化文学であった。少女小説を書くときには、当時の少女文学において規範となっていたようなモチーフや問題解決の手段を採用した。そして「子どもと子どもを愛する人のための物語」においては、それとはまた別の、児童文学上のモデルを利用したのである。以下では、とりわけ登場人物の描き方に関して、シュピーリがどのような児童文学上のモデルに依拠していたかを示すことを試みる。その際、対象はもっぱら子ども向けの作品のみに絞ることとする。シュピーリの大人向けの作品と少女小説は、ここでは扱わない。[2]

1. ドイツ語圏の児童文学との平行関係——ヴィルダームートとシュピーリ

ヨハンナ・シュピーリは1878年から1894年のあいだに、長短あわせて16冊の「子どもと子どもを愛する人のための物語」を出した。二冊の『ハイジ』本を除き、これらの「物語」は今日ではほぼ忘れ去られている。同時代のドイツ語圏の児童文学一般も、やはり同じ運命をたどった。この当時、どんな作者がいたかを今でも知っているのは、せいぜい専門家くらいのものである。

---

[1] C・F・マイヤーからシュピーリ宛、1883年9月2日。シュピーリからマイヤー宛、1883年9月3日。Zeller, (1977), S.47.

[2] シュピーリの少女小説については、以下のアリス・エットヴァインの論考を参照せよ。Ettwein, Alice: Johanna Spyris *Sina* im Kontext des zeitgenössischen Mädchenbuchs. In: *Lesarten*, S.63-89.

1892年、当時よく読まれた児童雑誌『わかばちゃんの暇つぶし』(*Herzblättchens Zeitvertrieb*)の第27巻の目次に挙がっている作者名を見ると、パウリーネ・シャンツや作家兼編集者のテクラ・フォン・グンパート以外では、今日ではすっかり忘れられた作家ばかりだ。もしシュピーリが1880年に『ハイジの修行時代と遍歴時代』を出していなかったら、おそらく彼女の名前も、その忘れ去られた名前のうちに紛れていたことだろう。

同時代の批評において、シュピーリは、やや年長の作家オッティーリエ・ヴィルダームート(1817-1877)としばしば並び称された。例えば、当時は教師をしていた作家ヤーコプ・クリスティアン・ヘールの1891年の文章によると、シュピーリ作品には「全体として、まことに女性的な、生の真実を伝える詩情が充満している。これらの作品に比肩しうるのは、私の知るかぎり、チュービンゲンに帰郷した作家オッティーリエ・ヴィルダームートの著作のみであろう。両者の平行関係は、その心情的・宗教的な内容からして、必然である。」[3] 実際、二人の女性作家の作品は多くの類似点を示している。二人とも「民衆のために」、そして子どものために作品を書き、二人とも、少なくとも短かめの作品においては、教化文学の伝統に連なっている。そして二人とも、よく似たモチーフを多用する。両親の病気と死や、故郷喪失や、孤児となった子どもの困窮など。――19世紀後半以降のドイツ語圏のみならず、児童文学において広く人気を博しているモチーフである。ヴィルダームートは、これらの教化文学に近い作品の他に、ときおりメルヘン的な作品も書いているのだが、シュピーリの場合は、メルヘン的・ファンタジー的なものは一切見られない。この点は、聖書に由来するもの以外のあらゆるメルヘン的・驚異的なものを厳格に退ける、敬虔主義の文学実践の特徴なのかもしれない。[4]

全体として、ヴィルダームートは自作の登場人物たちが暮らす生活世界への関心が深く、それはときに、郷土史的な方向を示す。そのような関心はシュピーリには見られない。彼女は自分が描く人物たちに集中し、彼らをきわめて正確に観察し、人物がそれぞれ言葉や動作で自分の特性を示すように仕向け、彼らを個性的に性格づける。よく知られている例に、『ハイジの修行時代と遍歴時代』に出てくる家庭教師の先生がいる。この人のしゃべり方は、ゼーゼマンのおばさまにとってもゼーゼマン氏にとっても「やや煩わしい」。[5] また、『ジルス湖とガルダ湖のほとりで』では、一人の素朴な農夫が、自分の娘をイタリアにやるかどうかの決断を迫られる。彼は、いざ決断を固める前に、「皿を脇に置き、帽子をかぶった。食事は済んだし、難しいことを考える際には、彼は帽子をかぶることにしていたのだった。まるで、帽子のおかげで考えがよくまとまる、

---

[3] Heer (1891), S.76.

[4] これに関しては、レギーネ・シンドラーの論考を参照。Schindler (1999), S.180f.

[5] Spyri, Johanna: *Heidi's Lehr- und Wanderjahre*. Gotha 1880, S.155. 以下の本文中、シュピーリ作品からの引用箇所は、括弧内に初版の頁数のみを入れて示す。(*Lesarten*, S.274ff.に所収の作品目録を参照のこと。)

とでも思っているかのように」(98)。こうした目立たない細部描写によって、シュピーリは登場人物に命を吹き込む。彼女が描く人物たちの多く、特に子どもたちは、心理学的な的確さにより裏づけられ、説得力がある。それに対して、物語の舞台はたいてい曖昧で、ステレオタイプ的に描かれている。ただし、ストーリーの進行のために風景が何らかの機能を負うときには、事情が異なる。そういう場合、風景は高められ、感情を込めて描かれる。

教化文学の形式要素、例えば祈りと歌、苦しいときは神にすがれという命令の反復などの要素は、ヴィルダームートにおいてもシュピーリにおいても数多く見られる。「神が支配の座につき、全てを導く」という信頼を、良いときも悪いときも失わないのは、『ティトスおじさんの休暇』のドーラだけではない。同じ詩行が他のシュピーリ作品にもよく引用されているのだ。特に印象的なのが、『カンダーグルントのトーニ』の母親が歌い、病身の息子の快癒をもたらす歌の役割である。ヴィルダームートにもまして強い信頼でもって、シュピーリは自作の中で、運が向いてくることを、祈りが聞き届けられた結果、あるいは神への揺るぎない信頼への報酬として説明し、問題解決の手段として、奇跡のような偶然を持ち出してくる。この点について児童文学批評家のハインリヒ・ヴォルガストは1896年、次のように書いている。「全てのできごとの原因と結果は自然界の中にあるはずなのだが、作者の宗教志向のせいで、彼女の作品の登場人物たちは全てのものごとの中に神の指を見て、それを崇めるのである。」[6] このように神の支配が全てに浸透していることは、シュピーリの文学が宗教的環境から出てきたことを示している。しかしながら、シュピーリの子ども向けの物語を教化的な児童文学に分類するのは性急すぎるであろう。それは『ハイジ』だけでなく、後の長めの作品についても言える。『ティトスおじさんの休暇』(1881)、『グリトリの子どもたちはどこまで来たか』(1883)、『グリトリの子どもたちは先へ進む』(1884)、『アルトゥールとスクワレル』(1888)、『コルネリは教育される』(1890)、『ヴィルデンシュタイン城』(1892)、『レーザ家の一人』(1894) などである。また、短編作品についても部分的に同じことが言える。

シュピーリが実際に既存の文学ジャンルの約束事に依拠していたと仮定してみよう。すると、疑問が浮かぶ。いかなる児童文学上の伝統およびモデルに、なのだろうか。『ハイジの修行時代と遍歴時代』は、同作をゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』と結びつけている作品タイトルからして、高尚な文学ジャンルとなんらかの関係にあるのは明らかである。その関係については、参考文献に挙げたハイディ・M・ミュラーとベッティーナ・フレルマンが説得力をもって示している。アイヒェンドルフの風景描写への近さについては、同じくハンスユルゲン・キーペが論証

---

6 ヴォルガスト『我らの児童文学の惨状』、第7版より。Wolgast, Heinrich: *Das Elend unserer Jugendliteratur. Ein Beitrag zur künstlerischen Erziehung der Jugend.* 7.Aufl. Worms 1950, S.217. [Hamburg 1896]

しているとおりである。しかし、ドイツ語圏の児童文学への関連性を取り出そうとしても、到底うまくはいくまい。シュピーリの子ども向けの物語作品を分類すべき児童文学上の環境は、私の考えでは、ドイツ語圏には見つからない。はるかにもっと関連性が深いのは、当時のイギリスの児童文学である。他ならぬ『ハイジ』においても、そしてそれ以外の作品においても、イギリス児童文学に登場する子ども像が姿を現すのである。

そんなわけで、シュピーリがそのつど自分が選んだジャンルの因習に従っていたという想定は、彼女は自分のイメージやモチーフをイギリス児童文学から借りてきていたという想定によって補完される。これを裏づけるため、以下ではまず文学の商業的な側面、すなわち書籍市場というレベルおよび伝記的な背景に目を向けたい。そしてさらに、シュピーリの児童文学作品に登場する子どもたちと女性たちの役割を概観し、そこから彼らのジェンダー役割を解釈すると、英国の児童文学との平行関係がはっきり目に映じてくることだろう。

2. イギリス児童文学への関係：伝記的前提

シュピーリは家族を介して、南ドイツおよびスイスの《覚醒運動》あるいはネオ敬虔主義と接点を持っていたし、同じ運動の北ドイツでの代表者にもつながりがあった。この運動は19世紀の初頭以来、数多くの大小の出版社および印刷所を勢力下に置き、高度に組織化された堅実な販売ネットワークを広げていた。ドイツ語圏の敬虔主義運動と、イギリスにおける同趣旨の諸団体とのあいだには緊密な結びつきがあった。中でも、バーゼル・キリスト教協会出版社はトラクト協会（英国冊子協会）やキリスト教知識促進協会と緊密に共同作業を行っていた。19世紀の末ごろ、これらの出版社からは、何冊かの英語の児童書が訳されて出版される。その中には、トラクト協会が擁する最も重要な女性作家の一人、ヘスバ・ストレットン（本名セアラ・スミス、1832-1911）の著作も含まれていた。これまでに見つかっているシュピーリの書簡その他の資料からは、そうした翻訳本を彼女が読んでいたことを示す具体的な証拠は挙がっていない。しかし、例えば彼女はブビコンのフリートヘルム校の婦人委員会のメンバーとして、児童向けの読み物をめぐる問題に携わらねばならなかったはずで、英語からの翻訳書などに触れる機会があったことは想像に難くない。シュピーリは、さらに別の経路からも、社会参加を基調とするイギリス児童文学に触れていた可能性がある。すなわち、シュピーリ作品をフランス語に翻訳したカミーユ・ヴィダールとの交友関係である。[7] ジュネーヴ出身のヴィダールは、国際廃娼同盟とジュネーヴ女性連盟の一員であったが、いずれもイギリスにおける同趣旨の組織と緊密な協力関係にあった

[7] シュピーリと仏訳者カミーユ・ヴィダールとの関係に関しては、ドニーズ・フォン・シュトッカーの論考を参照のこと。Stockar, Denise von: Les débuts de Heidi en Suisse romande. Camille Vidar. In: *Lesarten*, S.107-116, hier S.107ff.

団体である。イギリスでは、ヘスバ・ストレットンのように宗教団体に属していた女性作家たちも、廃娼運動団体とは近しい関係を結んでいた。したがって、イギリスとスイス両国にまたがり、社会参加に積極的なプロテスタント系の女性たちが共通の精神的背景を形成していたことは間違いないのである。[8]

3．シュピーリの児童文学作品における少年と少女

ヨハンナ・シュピーリは、一連の少女小説作品、中でもとりわけ『ジーナ』によって、保守的で女性解放に反対する立場の女性という評価を固定してしまった。彼女が保守的であったことは、おそらく間違いない。しかしながら、これまた疑問の余地のないこととして、女性解放に対する彼女の立場は、彼女の少女小説や処女作『フローニの墓に捧ぐ一葉』などを一瞥して感じられるほど一義的に否定的であったとは言えない。先に注に挙げたアリス・エットヴァインの『ジーナ』解釈は、保守的な作家というシュピーリ評価を相対化するであろうし、またギーゼラ・シェンクは学位論文の中で、女性の職業および学業についてのシュピーリの発言が両義的であり、一概に否定的であったとは言えないことを指摘している。確かに、シュピーリの児童文学作品には、軽率な結婚を病気と死でもって贖わされる女性たちのような、因習的な女性像が登場する。[9] あるいは、『グリトリの子どもたちはどこまで来たか』のノーラとエルスリ、『岩棚』のファイエリのような虚弱な少女たち。シュピーリはそうした少女たちに、あの世での幸福を夢みさせ、喜んで永遠の眠りにつかせるのだ。とはいえ、たくましくて行動力のある少女の方が数は多い。彼女たちの冒険が、作中でストーリーを前に進める原動力となる。作者シュピーリの共感は、明らかに彼女たちに寄せられている。『グリトリの子どもたちはどこまで来たか』のエミーが、そんな少女の一例である。――彼女はいつも、何か間違っていると思ったことがあったら、すぐさま他人事に首を突っこむ。とても着想豊かなやり方で。彼女の兄弟たちは、それが骨身にしみている。「あいつ、また何か企んでるぞ。〔…〕何か用事させておかなかったら、いったい何をしでかすものだか分からないよ」と彼女の兄は言う。もう何度か、おかしな事件が勃発したあとのことである（45）。

シュピーリの児童書では、『アルトゥールとスクワレル』のスクワレル、『ヴィルデンシュタイン城』のメーツリ、『ティトスおじさんの休暇』のリリなどは、みなエミーより年少に設定されているが、やはり同じタイプの女の子である。シュピーリの少女小説にも、同じく冒険心が旺盛

---

[8] これに関して、より詳しくは、アンネ=マリー・ケッペリ『崇高なる十字軍　プロテスタント系女性運動における倫理と政治』を参照。Käppeli, Anne-Marie: *Sublime croisade: Ethique et politique du féminisme protestant, 1875-1928.* Genève 1990.

[9] イヴォンヌ・フルーリの論考を参照。Fluri (2001).

で恐れを知らぬタイプの少女たちが登場する。だが痛ましいことに、彼女たちは作中で、やがて非の打ちどころのない若いご婦人へと飼い馴らされてしまうのが常である。例えば『ジーナ』の主人公にも、この公式を思わせる点が多々見られる。それに対して子ども向けの本では、女性の登場人物たちに、また別の未来が待っているように予感される。彼女たちは確かに、成長すると「前より理性的」になりはする。つまり子どものときほど思いつきのままに動くことはなくなるのだが、行動力そのものを失うことはない。そして彼女たちは、社会的な課題を実現するため、その行動力を投入するのである。最も典型的にその特徴が表れているのは、『ヒンターヴァルトにて』であろう。この短編では、若い女教師フランツィスカが、ブルジョワ女性団体の計画に即して啓蒙活動を行い、一つの村全体の衛生状態と労働状況を改善するのだ。

エミー、スクワレル、メーツリ、リリには、そしてもちろんハイジにも、それぞれ友人ないし兄弟として男性のパートナーが配置されている。少女たちはそのような男性を、ごく優しくではあるが、支配下に置く。エミーは、画家になりたいのに両親が貧しいために工場で働かなければならない少年ファニの面倒をみて、冒険的な企てを何度か試みたあげく、彼を自分が思うとおりの道に進ませるのに成功する。『グリトリの子どもたちは先へ進む』では、そんな企ての一つが大規模な破局を招きかけ、エミーは叔母に助けを求めるはめに陥る。「もちろん、何も悪だくみはしないってママに約束したのは覚えてたんだけど、でもこう思ったの。これは別に、悪だくみしたことにはならないわよね、ファニには自分のやりたいことが分かっていて、でも方法が見つからないだけ。だから私が味方してあげようって」(140)。スクワレルは、両親を亡くしたアルトゥールの郷愁を和らげるため、さまざまな思いつきをしてあげる。『ティトスおじさんの休暇』のリリは双子の弟ヴィリと仲が良く、「往々にして、やってはいけないと自分でもよく分かっている」ことを何度もやってしまうのだが、計画を立てるのはいつもリリの方である。なぜなら、「ヴィリは目に見えるものの方が好きで、目に見えないものを頭の中で想像するのはいつも骨が折れ、たいていはリリに助けてもらってはじめて少しなりとも想像できるようになるのだった」から(47, 73)。

これらの行動力ある少女たちに比肩する行動力をもつ少年たちは、シュピーリ作品中には姿を見せない。彼女の児童文学作品に出てくる男性の主要人物は、芸術家としての才能に恵まれた、繊細な少年として設定されていることが多い。彼らは自分の道を見つける前に、決まって苦しみの段階を経なければならない。『グリトリの子どもたちはどこまで来たか』の画家志望のファニも、その一例である。とりわけ印象的なのが、『カンダーグルントのトーニ』の主人公であろう。トーニは、母親が貧しいので、彫刻家の修行をするための授業料が払えず、山の上で一人きりで牛の番をしているうちに、とうとう不安と孤独のあまり気が狂いそうになる。『レーザ家の一人』のヴィンツェンツは、音楽家になるために父親の激しい反対を押し切らねばならない。こうした

設定において、シュピーリは因習的なジェンダー役割概念にきわめて接近している。芸術家の才能に恵まれた女性の登場人物は、ほぼ皆無と言ってよい。確かに『ヒンターヴァルトにて』の女教師フランツィスカは絵を描くのが好きだが、しかしながら本当に才能があるのは彼女ではなく、彼女の生徒である問題児シェルの方なのだ。

大人の男性は多くの場合、思いやりのある偉い人か、気むずかしい変人かのどちらかに描かれており、印象が薄い。短編『みんなに慰めを』の農夫ネッセルバウアーは、妻が三度目に妊娠したとき、三人目の息子ができたら、山積している仕事を片付けるのに役立つだろう、と考える。しかし娘なら

> 欲しくない。女のする仕事は、今でも妻が一人で片づけている。まじめに黙々と働く女だから。そこに若い娘なんかが来ても、ぺちゃくちゃ喋って時間を無駄にするだけだ。おまけに若い娘というのは欲張りだし。そのことはよく分かっている。だが、息子なら何かと使い道があるはずだ。〔…〕しかし彼が部屋の中に入ると、妻は言った。「男の子じゃなかった。女の子だよ。」
>
> そこで農夫はひどく不機嫌になった。こんなことは計算外だ。「そうかい。そんなものてめえの好きにしろ」と彼は言い、また外に出て行った。
>
> 日曜日が近づいてきた。赤ん坊を村に連れて行き、洗礼を受けさせる日だ。そこで母親は尋ねた。「子どもに何て名前を付けようか。まだ決めてなかったよね。」
>
> すると農夫は答えた。「エヴァとでも付けておけ。最初に男に不幸を運んで来やがった女の名前さ。」(5)

この娘エヴェリは、素朴な善意と優しさで、父親と仲の悪かった隣人を説得し、父親が長いこと欲しがっていた農地を売ってもらうことに成功する。「『あの土地は、今日中にでも売ってやるさ。そうしてほしければ。感謝なら、俺にではなく、あんたの娘にするんだな。あの子は俺に親切にしてくれた。あんたのような人間にあんな子ができるなんて、俺には奇跡としか思えないがね』」(57)。長年にわたって自分の娘をわざと無視しつづけてきた父親は、このとき初めて娘の存在を認めるのだ。しかし彼は、いまだ性役割にまつわる偏見に囚われたままである。エヴェリが、ご褒美として病院で働いてもいいという許しを求めると、父親は理解に苦しむ。「こんなやつが自分の子どもだとは。何でも欲しいものをくれてやると言われているのに、手を開きもしないとは。そんなことは彼の理解を超えていた。とはいえ彼は、この子が自分の主張に固執する頑なさに、紛れもなく自分との血のつながりを感じ取ったのであった。『こいつが男だったら、うちの稼ぎ頭になったかもしれんな』と彼は密かに思った」(60)。

ともあれ男性の登場人物のうちにも、一筋縄ではいかない人物像が姿を見せる。『ヴィーゼリの道はいかに見出されたか』では、主人公ヴィーゼリが母親に死なれ、それから不親切な親戚のもとで苦しい時を過ごしたあと、指物師のアンドレースに引き取られて養子となる。彼女は養父のことをお父さんと呼ぶが、彼はむしろ母親の役割を代行していると言ってよい。「ヴィーゼリは自分の身に何が起こったのか分からなかった。お母さんの声を最後に聞いて以来、誰もこんなふうに話しかけてくれる人はいなかった。まるでアンドレースの言葉と物腰のうちに、お母さんの愛がまた戻って来たみたいだった。子どもは思わず、両手で彼の手を握りしめた。ちょうど、お母さんがいつもしてくれたように。そのままの姿勢で、子どもはしばらくベッドのかたわらに立っていた。あんまり幸せだったので、何も言うことができないまま、こう思った。『きっと、お母さんもこれを知って、喜んでくれてる』」(213)。この他の男性の人物も、子どもを守り育てる機能を代行することがある。誰はさておき、『ハイジ』のアルムおじいさんをまず挙げるべきだろう。この人物は、ナポリで軍隊にいたころにも上官の介護をしていたとされるが、ハイジに対してはまさに母親らしい心くばりを示す。

> アルムおじいさんも、女性を所有せず、女性を必要としない。自らに帰属する母／妻としての女性を。主婦ないし母親の機能は、おじいさん自身が受け持つことになっている。乳しぼり、食事の時間や寝る時間、体を洗う時間の配分、そして食事の支度（腕まくりした腕をチーズの鍋に！）。小さな子どもの世話も忘れてはならない。実にさりげなく、あたりまえのように、おじいさんはヤギ飼いペーターと子育てを分担する。これらは、文化的な観点からすると女性的なモチーフであるが、ここでは男性的な特徴（あごひげ、太い腕、鋭い目）と結びつけられている。また、父親めいた語り口（名前を教えたり、説明したりする言葉。さらにはハイジを学校にやるよう求めた牧師や、フランクフルトに行こうとしたハイジ自身に投げつけられる否定の言葉）もそこに加わる。
>
> この作品には、男性の登場人物に女性的な機能を付与しようとする傾向が認められる。フランクフルトのゼーゼマン家に仕えるゼバスティアンが、その一例である。――使用人のうちでは、肯定的に描かれている唯一の人物でもあるが。[10]

つまりシュピーリは、子ども向けの作品において、規範的なジェンダー役割に一貫して依拠しているわけでは決してない。彼女はそれどころか、自作に登場する女性の登場人物たちに、スイスのブルジョワ女性運動が要求していた当の役割を割りあてているのである。その役割は、しかし

---

[10] Ulrich (1995), S.19.

当時のドイツ語圏の児童文学にあっては通例では見られないものであった。それに対して、イギリスの児童文学においては、あるいはそこで理想化されて描かれた女性や子どもの姿においては、シュピーリが描いた人物たちのモデルないし血縁が見出される。

4.「守護天使たち」

アメリカの文学研究者クローディア・ネルソンは、ヴィクトリア期の児童文学を論じた『少年は少女になる』において、ヴィクトリア時代には心理社会的な女性性（womanliness）が支配的になり、生物学的な女性性（femaleness）を統括ないし排除するようになったと述べている。その経緯から、一つの元型的な女性像が生成した。《天使としての女性》である。それに対して男性は、自らの生物学的な男性性（maleness）と心理社会的な男性性（mannliness）のあいだの葛藤に苦しむことが多く、その結果、はっきりとした輪郭をもつ統一的な理想像が形成されるのは不可能となったという。

> 女性性を具現化した《家庭の天使》の像は唯一無二のものであり、この像はロンドンのスラム街やクリミアの戦場までも、家庭的なオーラを持ち運んでいった。それに対して、兵士であれ、騎士であれ、男らしさというものがただ一つの理想的イメージに収斂することはなかった。女性がもっぱら私的領域に関連付けられていることが、女性の力の源と見なされた。不幸にも男性に生まれたために、もっぱら公的領域での活動を余儀なくされた男たちは、依拠するべき神話的な役回りを持たなかった。家庭という場に強固に根づき、記憶力と人間性を研ぎ澄ませた女性たちは《元型》となったが、それに対して男性たちは《大人》になるしかなかった。[11]

女性と子どもは政治的な力も経済的な力も持たず、それゆえに産業化の社会的影響について責任を負うこともなかったため、――とネルソンは続けている――女性と子どもは「男性的」な大人社会への対抗社会を象徴する存在となりえた。それは、特殊的に「女性的」だとされた諸価値、すなわち優しさや思いやり、共同体精神や相互の敬意、精神的な平等などにもとづくトポスなのである。女性にまつわる理想像は、現実の女性に、秩序をもたらし守り育てる使命を割りあてた。物質的なレベルではなく心や精神に関わる「修繕の仕事」である。だが女性の活動領域は、自分自身の家の枠を超え、大都会のスラム街へ、さらには遠い国々への伝道にまで拡大していく。そのことによって、女性の活動は政治的次元を獲得した。とりわけ、プロテスタント系の団体に近

---

[11] Nelson (1991), S.2.

いところにいた女性作家たちは、こうした女性のイメージを、自らの児童書の中に持ち込んだのだった。当時の女性たちにとって、宗教的責務と日常生活とを一致させるべく常に努力せよという敬虔主義の要求は、その有効性を失うことがなかった。そして彼女たちは、その要求を社会的なレベルでも貫徹させようとした。例えば、廃娼同盟の活動において。

子どもは、このような女性の世界に参与するものであった。子どもは無垢と自然とを体現した存在であり、どれだけ困難な状況下においてもそうであった。そして児童文学の中では、子どもは女性とよく似た使命を背負わされたが、それだけでなく、ある種の特別な力をも付与された。「スズメとタカの重要性を等しいものと見なす福音派の立場は、子どもたちに父たちと同等とも言える権力を付与することになった。――ただ、その権力の性質は異なっており、それは母たちに由来するものであった」。[12] この意味での子ども像に、シュピーリの描く人物像のいくつかは合致する。例えば『レーザ家の一人』のヴィンツェンツや『みんなに慰めを』のエヴェリ、そして言うまでもなくハイジである。

自らの無垢さによって周囲を善へと変えていく子どもというモチーフは、例えば当時のベストセラー『ジェシカの初めてのお祈り』(1867) に見られる。その作者は、先に言及したヘスバ・ストレットンである。彼女は英国冊子協会に属する最も重要な女性作家の一人であり、ロンドン児童虐待防止協会の創設者に名を連ねていた。『ジェシカの初めてのお祈り』のドイツ語訳は1871年にベルンで出版され、1884年にはすでに、バーゼルのシュピットラー社で第七版を数えた。[13] この同じ出版社から、ストレットンの別の作品も刊行されている。主人公のジェシカは路上生活を送る少女であり、教育を受けずに育ち、宗教の知識もない。しかし彼女は、どんな貧困の中にあっても失われなった生来の善意と無垢さによって、真のキリスト教の認識へと大人たちを導くのである。素朴さゆえに偏見をもたず、自然に近いために周囲に幸せをもたらす子どもといえば、もう一人、フランシス・ホジソン・バーネット (1849-1924) の『小公子』(1886) のセドリックがいる。みんなに嫌われている無愛想な祖父ドリンコート伯爵と引き合わされるとき、この少年は七歳である。ハイジと同じように、彼は優しさと人懐っこさで祖父の頑なな心を溶かし、その財産を貧しい人々のために使わせることにまで成功する。セドリックがもつ善良な性格特性は、全て母親の善意と愛情に由来しており、彼はこの母にきわめて緊密に関連づけられている。セドリックの共感能力と思いやりは、もとより女性的な特性とされるものである。子どもにおいては、男女の区別がまだあまり明瞭に区切られてはいないのだ。

---

[12] Ebd.

[13] 独訳タイトルは *Jessika's erstes Gebet* である。最初の独訳は1870年にハンブルクで出版される。その後、さまざまな出版社から1922年までのあいだに多くの版が出された。

5．詩的リアリズム

シュピーリと同じ時代に生き、同じ信仰を共有していたイギリスの女性作家たちとシュピーリのあいだには、一つの大きな差異がある。例えばヘスバ・ストレットンは作品の舞台をイギリスの大都会のスラム街に設定したが、これはプロテスタント系の伝道団体の主な活動領域であった。彼女は都市生活の弊害を克明に描いた。これはチャールズ・ディケンズが一連の長編小説で開拓した分野である。そのようなリアリズム文学を、同時代のドイツ語圏の児童文学は参照項として持たなかった。もっとも、その事態に、シュピーリ文学において都市空間が抽象的な文化空間としてしか姿を現さない理由を求めるのが妥当だとは思えない。シュピーリの児童文学作品にも、貧困そのものは頻出するが、それは常に田舎の貧困である。そこで貧困に苦しむ姿が描かれるのは、農業や内職に従事して日銭を稼ぎつつ糊口をしのぐ人々ばかりであり、工場労働および都市の貧困というものを、シュピーリは自らの文学世界から完全に閉め出している。その理由の一つが、シュピーリの読者がスイスを舞台にしたアルプス物語をもっぱら期待していた点にあるのは間違いない。シュピーリはドイツの読者を対象に作品を書いていた。それは例えば、『ハイジ』の初期の版では「牧場」を表す語に「アルプ」（Alp）ではなく「アルム」（Alm）が用いられていたことや、また「土曜日」がSamstagではなく北ドイツ方言のSonnabendとなっていた経緯などからも窺える。[14] さらに、1888年以降に多くの版に採用され、しばしば各章の冒頭を飾るカットに使用されたヴィルヘルム・クラウディウスの挿絵も、読者の期待がどのあたりにあったかを如実に示している。それらの絵は例外なくアルプスの風景を題材にしているのだ。例えば、『グリトリの子どもたちは先へ進む』では、アルプスの牧場の絵の下に、こんな文章が続いていたりする。「ケルン旅行の日が来た。〔…〕子どもたちはライン川下りを楽しみ、大きな動物園を隅々まで徹底的に探索したのだった」（82）。出版社は、読者の期待に応えるため、本の装丁や見返しにもアルプスの風景に由来するモチーフをあしらった。たとえ本の内容がアルプスには関係ない場合でさえも。

シュピーリが都市の貧困と工場労働を排除した理由としては、彼女が社会および経済の変遷に対して基本的に保守的な立場を維持していたことも考えられる。シュピーリは、宗教的な責務に接続することにより、近代化がもたらす最悪の影響を緩和しようとした。彼女は、進行する世俗化に対して神への信頼と祈りとを対置し、進行する都市化に対して村の伝統的な社会構造の意義を強調したのである。

シュピーリ作品において、この伝統的秩序を代表するのは、牧師とその妻、大佐夫人、裕福な農夫やその妻などである。彼らは昔ながらの役割を守り、貧しい人々に救いの手をさし伸べる。

---

[14] この点に関しては、ローラント・リースの論考を参照。Ris (1994), S.47f.

短編『ラウリの病気』(1890) では、道を踏み外したラウリを少佐夫人が正道に引き戻す。『カンダーグルントのトーニ』(1882) では、ジュネーヴから来た貴婦人がトーニの教育費を提供し、『グリトリの子どもたちはどこまで来たか』の片親を亡くしたファニとエルスリを、お金持ちのスタンホープ夫人が家に引き取る。こうした女性たちは、敬虔主義的な態度を典型的に代表してもいる。彼女たちは自らの裕福さを神の賜物と、つまり神の意にかなう生活を送ってきたことの報酬と見なしているが、そこから社会的責務をも導き出す。このような女性のことを、チュービンゲンの民俗学者ヘルマン・バウジンガーは、「神の高貴なる信託者」と呼んでいる。こうした女性たちに対置される、新しい拝金主義的な秩序を代表する人々に、シュピーリは怒りを隠さない。そもそもシュピーリ作品には、本当に否定的な人物はめったに登場しないのだが、その例として――ロッテンマイアー嬢と並んで――『グリトリの子どもたちはどこまで来たか』の「ずば抜けてお金持ちなビッケル氏」とその家族が挙げられる。『ヴィルデンシュタイン城』(1892) のクニッペル家の人々も、ビッケル家の人々と同様、社会的な上昇を遂げた存在である。こうした成り上がり者たちを、シュピーリは、他人にはお構いなしに自分の財産を増やすこと、上流階層へ仲間入りすることだけ考えている人々として、怒りを込めて描いている。義務教育を終えたら工場で働かなければならないという見通しに脅かされているのは、上述のファニだけではなく、短編『おばあさんの教えの効用』(1886) のトリーニも同じである。そして工場で働かなくても済むことが、彼らの人生の幸福として位置づけられている。

貧困は、シュピーリの時代にも大衆的な規模の現象であったはずだが、シュピーリ作品においては――例えばヘスバ・ストレットンの作品の場合とは異なり――個人的問題として、個人的に解決することも可能なものとして描かれる。そこで、ハインリヒ・ヴォルガストは、彼女の貧困描写について、以下のように書きもしたのだった。「貧困は、どの作品の中でもさまざまな形で繰り返されるものの、説得力ある理由づけがなされることは一度もなく、ただ並べられている。――または、怠慢やふしだらの結果として、あるいは扶養者の病気や死の結果として説明されてしまう。これではあまりに一面的だ。いや、それどころか倒錯的だと言うしかない。ともあれ、シュピーリ夫人の国民経済学の素養を吟味しなければならない義務は我々にはないし、この点をめぐってどちらが正しいか争うのは止めにしておこう」。[15] ヴォルガストはさらに、シュピーリは「現代に背を向けた反リアリスト」だと批判している。この批判は、おそらく少しばかり修正が必要だろう。貧困へのシュピーリの選択的視線は、現代に背を向けた結果ではなく、現代への反動であった。――先に述べたように、宗教的な責務に接続することにより、近代化がもたらす最悪の影響を緩和しようとする試みだったのである。やはりこの点においても、シュピーリは同

[15] ヴォルガスト前掲書を参照。Wolgast (Anm.6), S.218.

時代のイギリスの女性作家たちと一致している。

そして、さらにもう一つの一致点がある。シュピーリの語りの大きな特徴の一つは、登場人物を個性的に性格づける能力である。鋭い観察にもとづく簡潔な細部描写によって、彼女は人物の性格を浮かび上がらせる。その筆致には常にユーモアが隠れているか、またはヤギ飼いペーターの描写に見られるように、あからさまにユーモラスである。これに関連して、従来むしろ批判の契機となってきたものを、むしろ肯定的に評価することができるだろう。あるとき、ベッツィ・マイヤー宛の手紙の中で、相手の兄のコンラートと交わした会話についてシュピーリは報告している。「私たちは腹を割って話し合いました。もっとも、お兄さんは私の言葉について、何度か身震いせずにはいられなかったようですが。一度など、恐怖のあまり叫んでおられたほどです。確かに、おっしゃることが正しいのかもしれません。ただし、そんなに俗な言葉づかいをするのさえご遠慮いただけたらの話ですが！とね」。[16] 実際、シュピーリ作品には、日常生活に密着した言い回しや、砕けた調子の詩歌などが散見される。例えば『グリトリの子どもたちはどこまで来たか』には、しょっちゅう泣きわめいている少女リクリと幼児ハンスリに対して、こんな歌が歌われる場面がある。

リクリとハンスリ、
おまえら、ほんとの姉弟みたい。
ツグミみたいに歌うけど、
聞いたことないほどやかましい。(66)

そのような話し言葉への接近、そしてときに無教養な人々の言語への接近は、当時のドイツ語圏の児童文学においては、決してあたりまえに見られるものではなかった。ほぼ唯一の例外として、ヴィンタートゥールの芸術家・作家のアウグスト・コローディの名を挙げることができるだろう。やはりスイスのドイツ語圏の出身者である。そんなわけで、オッティーリエ・ヴィルダームートが1859年に、長期滞在するべくスイスに旅行した娘に宛てて書いた手紙の内容は、もしかすると的を射ていたのかもしれない。「もう一つだけ、アグネス。ここだけの話。理由はよく分からないのだけれど、スイスでは若い人たちが相当ぶしつけに、うちの国では無礼だと見なされるような話し方をすることがあるらしい。そこには、何かしら感染力があるようなのです。まさに、そういう若い人たちに悪意はないという理由で。もしそんな場面に出くわしたら、とりわけ年配の独身女性とお話しするときには、汚染されないように気をつけなさい。礼儀と道徳に対する、

[16] シュピーリからベッツィ・マイヤー宛、1864年6月7日。*Lesarten,* S.239.［同書付録15番］

女らしい慎みと恥じらいに対する鋭敏な感覚を失わないように[…]」。[17] すなわちシュピーリは、自らの児童文学のモデルを、並外れて道徳志向の強いドイツ児童文学に求めたわけではなかったのだ。そういう文学は、ロッテンマイアー嬢にならお気に召したかもしれないが。むしろ、リアリズム文学の流れを汲む、ディケンズの影響を受けたイギリス児童文学こそがシュピーリ文学のお手本であった。シュピーリは英国の児童文学を自己流に受容し、部分的には——特に舞台設定については——自分の読者に合わせて味つけを施した。こうして彼女は、ドイツ語圏の児童文学に、新しい風を持ち込んだのである。

参考文献

Cutts, Margaret Nancy: *Ministering Angels. A Study of Nineteenth-century Evangelical Writing for Children.* Wormley 1979.

Fluri, Yvonne: Schwache Mütter, verletzte Väter. In: Halter, Ernst (Hrsg.): *Heidi – Karrieren einer Figur.* Zürich 2001, S.83-93.

Heer, Jakob Christoph: Johanna Spyri, eine schweizerische Jugendschriftstellerin. In: *Schweizerische Pädagogische Zeitschrift* 1 (1891), S.74-86.

Hurrelmann, Bettina: Heidi – Mignons erlöste Schwester. In: *Neue Sammlung* 3 (1993), S.347-363. [Wiederabdruck in: Hurrelmann, Bettina (Hrsg.): Klassiker der Kinder- und Jugendliteratur. Frankfurt am Main 1995, S.191-215]

Kiepe, Hansjürgen: Landschaft Gottes: Zur Rolle der Verbzusätze in Johanna Spyris «Heidi» In: *Wirkendes Wort* 17 (1967), S.410-429.

Mesmer, Beatrix: *Ausgeklammert – Eingeklammert: Frauen und Frauenorganisationen in der Schweiz des 19. Jahrhunderts.* Basel / Frankfurt am Main 1988.

Müller, Heidy Margrit: Pädagogik in Johanna Spyris «Heidi»-Büchern. Literaturgeschichtliche Koordinaten eines Bildungsromans. In: *Schweizer Monatshefte* 11 (1989), S.921-932.

Nelson, Claudia: *Boys will be Girls. The Feminine Ethic and British Children's Fiction, 1857-1917.* New Brunswick 1991.

Ris, Roland: Vom «Verbrüderungs»-Konzept Johanna Spyris zur «Geistigen Landesverteidigung». Schweizerisch-deutsche Kulturbeziehungen im Spiegel der Sprache schweizerischer Jugendbuch-autorinnen. In: SJI (Hrsg.): *Horizonte und Grenzen.* Zürich 1994, S.33-74.

Schenk, Gabriela: *Zwischen Heimat und Heimweh. Eine Untersuchung von Johanna Spyris Gesamtwerk und seiner Positionierung in der zeitgenössischen Literaturszene.* Lizentiatsarbeit. Zürich 2001.

Schindler, Regine: Form und Funktion religiöser Elemente in Johanna Spyris Werken. In: SJI (Hrsg.): *Nebenan. Der Anteil der Schweiz an der deutschsprachigen Kinder- und Jugendliteratur.* Zürich 1999, S.173-199.

Ulrich, Anna Katharina: Natur als Erziehungskulisse: Mutterbilder im Vaterwort. Psychoanalytische Deutungsversuche zu zwei Schweizer Kinderbuchklassikern. In: Nassen, Ulrich (Hrsg.): *Naturkind, Landkind, Stadtkind.* München 1995, S.9-24.

Zeller, Hans und Rosmarie (Hrsg.): *Johanna Spyri – Conrad Ferdinand Meyer. Briefwechsel 1877-1897.* Mit einem Anhang Briefe der Johanna Spyri an die Mutter und die Schwester C.F. Meyers 1853-1897. Kilchberg 1977.

---

[17] Ottilie Wildermuth 1817-1877. Bearb. von Rosemarie Wildermuth. In: *Marbacher Magazin* 37 (1986), S.22.

訳者解題

本訳稿は、2001 年にヨハンナ・シュピーリの没後百周年を記念してチューリヒで開催された国際会議での報告をもとに編まれた論集『ヨハンナ・シュピーリとその作品』(2004) に所収の論文のうち、ヴェレーナ・ルッチュマン氏の論考の全訳である。氏は現在、スイス児童メディア研究所*1 の研究員としてスイス児童文学の研究に携わっておられる。本論考の画期的な点は、1970 年代の後半から進められたシュピーリ伝記資料の発掘作業*2 と、その成果を土台にして 1990 年代に本格化したジェンダー論的な『ハイジ』研究の流れを綜合的に俯瞰しつつ、シュピーリの児童文学作品全般へと視野を拡大した点にある。とりわけ、同時代イギリスの児童文学との平行関係に着目した点はきわめて斬新であり、今後のシュピーリ研究は本稿で提示されたテーゼを一つの軸として推移していくであろうと予測される。本誌への翻訳掲載を快諾してくださったルッチュマン氏に感謝を申し上げたい。

なお、原文は後注形式であるが、ここでは全て脚注に変更している（必要と思われる場合には、注の内容に書誌情報等を適宜補った)。また本文中の各節の小見出しには通し番号を付した。

---

*1 http://www.sikjm.ch/

*2 そのうち、本文中でも参照されているC・F・マイヤーの往復書簡は、ともすれば「ハイジ」の像と同一視されがちであった作家シュピーリ像の転換を企図したもので、後の研究方向の流れを決定づけた契機として重要である。Vgl. Zeller (1977).